

新臨床栄養学



編集：岡田 正, 馬場 忠雄,
山城雄一郎

B5 頁 640 2007 年
定価 9,975 円 (本体 9,500 円 + 税 5%)
[978-4-260-00284-4] 医学書院刊

かつて、『栄養化学概論』（芦田淳著，養賢堂）という名著があり，多くの人が正しい栄養学を学ぶことができた。しかし，現在「食物や食品に含まれる栄養成分のみをテーマとするのではなく，同時に，それを受け入れる人間の側に立って考察していく」風潮が大きな支持を得つつあります。さらに，高齢者の栄養を考える時，“人間の尊厳”を重視した「人間栄養学」をめざした努力も推し進められています。

このような視点に立った栄養学の名著が次々に上梓され，わが国に輸入されています。特に，Garrow らによる“Human Nutrition and Dietetics”（邦訳：『ヒューマン・ニュートリション—基準・食事・臨床』医歯薬出版），Allison の“Nutrition in Medicine A Physician's Views”（邦訳：『医師のための栄養学』ダノン健康栄養普及協会）などは真に味わいのある栄養学の指導

書とってよいと思います。

しかし，残念ながら，日本人を対象とした系統的な人間栄養学（臨床栄養学）の専門書は決して多いとはいえません。このたび外科，内科，小児科領域の編者からなる，綿密な企画に沿った意欲的な著書が，医学書院から刊行されたのは注目に値します。「栄養は力」であるという自己体験をもつ臨床家として，病態改善を優先させた「栄養治療」は“医食同源”という東洋思想にも合致したもので，薬物治療に勝るとも劣らない，しかも，身体に優しい治療法といえます。

栄養アセスメントから栄養治療へ，チームワークから多職種協働の NST へ，生活習慣病の栄養学（内臓脂肪の役割），時間栄養学，オーダーメイドの栄養学（個の栄養学），など新しい領域の病態栄養学が精力的に盛り込まれております。

なかでも，糖尿病の記述は圧巻であり，摂食・嚥下障害，肝移植も大変優れた内容ではないかと舌を巻いた次第です。高齢者の栄養学（骨格筋萎縮 Sarcopenia）は今後の一大テーマですが，倫理的にも統一した見解が十分とはいえません。合併症に密接に関連した低栄養は当然治療の対象になりますが，一方，“irreversible”な（超）高齢者の低栄養状態は果たして“aggressive”な処置をすべきかは問題で，安らかな「死の準備」の裏返しではないかとも想像されてなりません。